

### ■ 2歳児さんのママの声より…

息子の耳が聞こえないということは、生後5日目の新生児聴覚スクリーニングでわかりました。それから様々な検査を受け、最終的に先天性重度感音性難聴との診断を受けました。それまでは、内耳や聴神経の未熟性のため、これからの成長で結果が覆ることもあるという淡い期待をもっていたので、心の踏ん切りがつかずモヤモヤした日々を過ごしていました。インターネットを見あさって一喜一憂したり、難聴治療をうたうあやしい場所に危うく行きそうになったりもしました。聞こえるようになるためには、どうしたらいいのか…毎日そればかりを考え、口開けば涙も一緒に出してしまうような、そんな精神状態でした。でも「ほとんど聞こえない」という聴力の程度が、状況を把握するにはあまりに分かりやすく、「息子は聞こえない」ということを受け入れるのに、あまり時間はかからなかったように思います。そこには、ひよこぐみで過ごした日々と、数々の出会いの後押しがありました。

ひよこぐみでの相談やグループ活動を通して、息子と私はコミュニケーション手段が違うだけということを知りました。それなら、私達が息子に寄り添えば良いのだと、パーっと霧が晴れたような気持ちでした。息子は息子、聞こえないままで良いのだと気づいたのです。

そして、コミュニケーションの手段こそ違うものの私達は親子です。分かり合えない手話ならコミュニケーションとは言えません。手話単語を覚えることも大切だと思います。でも、どんなに手話が上手でも、子供の気持ちを分かちあげられなかったら意味がない…コミュニケーションの根底には伝え合う姿勢や親子の信頼関係が大切であり必須なんだと実感しました。

そして、息子のロールモデルである「ろう者」との出会いは、我が家にとって心の拠り所となる大切な出会いでした。彼らを通して、聞こえない世界やろう文化、ろう社会でのルール、ろうならではの表現等について知ることができました。このことは、息子を理解することにもつながり、試行錯誤しながらではありますが、家族間でのやりとりがスムーズになっていきました。

私達が手話を覚え始め、息子に手話で語りかけ始めてから数ヶ月…息子は生後7か月頃から、私の手話表現を見て笑ったり喜んだりするなどの反応を示してくれるようになり、そして生後10か月頃に手話初語を表現してくれました。息子の記念すべき一言目は「ぱいぱい(おっぱい)」でした。おっぱいを飲むのが大好きな息子らしい一言でした。それから息子と「通じる・伝わる」という経験を一つ一つ着実に積み重ねています。息子としっかり通じ合える度に、努力が報われたような気持ちになり、息子とのやりとりは、今もどんどん、どんどん楽しさを増していています。

私たち夫婦のもとへ、息子が来てくれたことによって、たくさんの変化がありました。新たな価値観や考え方、そして「手話」という新たな言葉も得ることができました。息子の親になれて本当に幸せです。新たな世界への扉を開けてくれた息子への感謝をこれからも忘れずに、親子で育ち合っていきたいと思います。

最後に、このひよこぐみで、たくさんのお友達ができました。そして、それぞれの子供たちのおかげで「同志」と呼べるようなママたちと出会うことができました。これからも、お互いの子供たちの成長を我が子のことのように喜び、見守りあっていける関係でいたいと思います。

